

現地の教育事情と体験

—現地校での日本語指導を通して—

前高雄日本人学校教諭

愛知県一宮市立中部中学校教諭 西川 健二郎

キーワード：在外教育施設、高雄日本人学校、日本語指導、現地校

1. はじめに

高雄は、台湾の南部に位置しており、人口は277.3万人(2019年5月現在)である。台湾最大のコンテナ港があり、国際的に貿易港を有する高雄は、台湾第2の都市である。面積は、36,000 km²、九州よりやや小さい。熱帯に属しているため、真夏には強い日射しが照りつけるが、その分冬は温暖で過ごしやすく、パイナップルやマンゴーなど、南国フルーツの名産地である。また、高雄の人々は親日な方が多く、高齢者の中には、日本統治時代の名残もあり、日本語を話すことができる方も多数いる。また、若者の中には日本語を勉強している学生や日本の文化に興味をもつ人々がかかり増えている。近年、インフラが整備されて、MRT(地下鉄)やバス、ライトレールなどを利用した移動が容易になっている。また、治安も安定しており、日系デパートや日本料理店も充実しており、日本人にとっては、たいへん暮らしやすい街である。

2. 高雄日本人学校について

高雄日本人学校は、台湾日本人会高雄支部により運営されており、1989(昭和44)年11月に創設された。小学部から中学部までは、全て単学級で計9学級85名(2019年6月現在)の児童生徒が在籍している。校訓は、高雄の字から「た」・たくましい子、「か」・考える子、「お」・思いやりのある子である。教育目標は「日本国民として必要な基本的素養を育み、また国際社会に生きる者としての基本的素養を育む(グローバル人材の育成)」と「変化の激しい社会に対応し、生涯に渡って学習し続けるために必要な、基礎的・基本的な学力を確実に身に付けさせる(確かな学力の育成)」及び「知・徳・体・情・意、それぞれが上質で、バランスがとれた人間を育成する(生きる力の育成)」である。

本校は、現地校**高雄市苓雅區中正國民小學校**(以下中正國小校と略す)舎の一棟を借用して開校しており、中正國小児童約1500名と同一の校地の中で生活している。極めて親日な台湾、高雄だからこそ可能な学校運営形態である。この状況を最大限に活かし、小学部では、毎年11月に学年ごとの交流会を実施している。また、教員も中正國小の日本語指導へ出向くなど、交流活動を基盤とした教育実践を行っている。特に中学部の鹽埕國中との交流は、今年で36年目を迎えるなど、継続性のある交流活動が実施されている。また、本校の伝統的な取り組みとして、和太鼓の演奏があり、主に現地校との交流活動や日本人会の忘年会等で披露している。伝統を継承するために、児童生徒と職員が練習に参加している。現地校との交流会では、相手校へ演奏の仕方を教えるなど、コミュニケーション手段の1つとしても機能している。ここから巣立ち、世界を舞台に活躍できる人材の育成を目指し、日々支援を続けている。

3. 成果と課題

高雄日本人学校が他の日本人学校と大きな違いがあるとするなら、現地校への間借りと現地校への日本語指導である。派遣2年目以降の教員が、中正國小へ出向き日本語指導をしている。中正國小に校舎を移した、平成27年

から開始され、今年度が5年目にあたる。授業時数は、年間で全60時間。期間は、現地新学期が始まる9月から12月までの3か月である。週に一度、担当学級の児童が本校の職員室まで迎えに来て、ともに教室へ移動する。対象は、小学校5・6年生である。また、現地は満6歳の9月から小学校に入学するため、日本では、小6と中1にあたる。1人が12時間を受け持ち、挨拶や基礎的な日本語を指導している。児童には、両親のどちらかが日本人という場合や、小学校卒業後、日本の中学校へ進学するというケースもあり、日本語に親しみを感じている。また、学級担任も日本語が堪能な方もおり、授業の中で児童へ補足説明をし、協力してくれる方もいる。

授業内容は、日本語指導の開始当初から指導案を毎年精選していき、誰でも授業実践ができるように改善してきた。両学年とも各3時間分の指導略案や児童用ワークシート、プレゼンテーション資料が作成されている。また、前年度の担当者を1人継続して、データや資料を効果的に活用している。一昨年から、文部科学省の「在外教育施設における高度グローバル人材育成拠点事業「AG5プログラム」の1部となっている。また昨年度からは、海外子女教育振興財団からの支援をいただき、タブレット端末を20台購入した。1クラス当たりは4台程度の配分となるが、日本語指導のさらなる学習効果をねらって、その利用方法についても今年度研修を進めている。



日本語指導の様子

4. おわりに

現地校に間借りしている世界的にも稀な日本人学校であることから、学校運営について深く考える機会をいただいた。「ハードからソフトへ」を合言葉に児童生徒一人ひとりにきめ細かい指導をすることで日本人学校の特色を出していくことが大切であると知った。

日本の学校でもこの経験を生かして、地域や児童生徒の実態を生かしたカリキュラムマネジメントの視点で学校運営を支えていきたいと思っている。また、日本語指導で学んだコミュニケーション能力を生かして、外国籍の児童生徒への教育環境整備も整えていきたい。これからますます広がるグローバル社会で活躍する人材を育てていくことにより一層尽力していきたい。